

津田昇平教話 第八十話

令和三年三月二一日 朝の教話

死んだ者のそばで泣いたり悲しんだり、悪い
ことを言うものではない。御霊が苦しむ。ほ
めてやれば御霊が浮かぶ。

おはようございます。令和三年三月二十一日の朝をお迎えすることができました。

今日は、昨日の春季霊祭しゅんきうれいさいに続きまして、墓前祭ぼぜんさいが仕えられます。奥城墓前祭おくしきぼぜんさいですね。御道おみちではよく、お墓のことを「奥城おくしき」と申し上げますね。尼崎教会の奥城は、弥生ヶ丘墓園やよいがおかぼえんという、市営の墓園の中にあります。周りに比べると、その奥城の敷地もかなり大きい方だと思いますけれども、そこで、天候のお繰り合わせを頂きながら、万事にご都合お繰り合わせ頂きながら、今日はお祭りをお伝えさせて頂きます。

ここまでは、亡くなった方、死者と生きている者との本来の在り方、

関係性についてお話をさせて頂いてまいりましたけれども、まさにその時亡くなった方、死を迎えた、その瞬間と言いますかね。そういう方に対して、どのような信心をさせて頂いたらよいのかということについては、まあ少し置いてたところがあります。

教祖様は、

死んだ者のそばで泣いたり悲しんだり、悪いことを言うものではない。御^{みたま}霊が苦しむ。ほめてやれば御^う霊が浮かぶ。

〔理Ⅱ 伝承者不明 十九〕

このようにしてご理解下さっています。自分自身が死を迎えるという時の信心は、また別にあるんですけども、自分ではない方が死を迎える、それを残される者として受け入れる立場の時の信心の在り方ですね。ここで一つ、指針が出てるかなと思います。

もう今まさに亡くなったということ、今日明日にでもご葬儀そうぎが仕えられるとか、そういう時ですね。一報を聞いたりした。驚いて駆けつけて、泣いたり悲しんだり…ってまあ、なるのはある意味自然なんですけれども。でも、教祖様は「ほめてやれば御霊みたまが浮うかぶ」と仰いますね。「泣いたり悲しんだり、悪いことを言つと御霊が苦しむ」とも仰ってる。

御霊様のことを一番に考えてあげなさいということなんでしようね。安心させてあげなさい、とということなんでしようね。「辛いつらねえ、悲しいねえ」っていうので、ワッって泣いてしまうというのはこれ、自分を中心にしたらそうなりますね。

でも、それを見る御霊様は、どんな思いになるかっていうことを今度考えたら、「泣いてくれて嬉しいうれい」って、まあ思ってくれたらいいんですけれど。でも、もしもですよ、御霊様も何か、自分自身のことよりも、自分が亡くなった後のこと、家族のことやら、大事な存在のことについてやら、あるいは仕事のことやら、そういった諸々のことが気にかかってて、不安も抱えながら、でも、ここまでの命として受け入れていく。自

分の死は受け入れることはできるけれども、自分が亡くなった後のことを思うと、その点については、気がかりなところがあったりする。そういう場合は少なくないと思うんですね。

じゃ、そんな時に、一般的なこととしてね、考えて、亡くなった人の心中しんちゆうを察してですよ。その人の立場を考えたら、「あんた、まだちっちゃい子どもおんに、どないすんのよ」とかね。「あんた死んでしまったらもう、このちっちゃい子たちがもう、この先のこともう大変やんか」って、「えーん」って泣いてたら、「苦労するよー、もうー」って言うて。

まあ普通に考えたら、確かにそれはひとつ、一理いちりあるんですけども、けれどもそれ、何のために言うてるんかの問題ですよ。御霊様のこと

思うて言うてるんか。それよりは、ただ自分の思いとして、気がかりなことを、ただぶつけてるだけなんでしょうね。御霊様のことを思って、御霊様に安心して頂くとかいうことではないでしょうね。これ、生きる人が、自分中心なんですよね。我情我欲がじょうがよくの我情なんでしょうね。

「ほめてやれば御霊が浮かぶ」「悪いこと言つて御霊が悲しむ」、御霊様だって、そら自分が、まあね、「もう安心、安心。もう後は、残されたもんが何とかやってくれるから大丈夫や。もうそれだけのおかげ、生きてる間におかげ頂いたし、もう大丈夫、大丈夫」と思って、「安心してお国替えさしてもらった」と言うんであればね。これはまあ、ありがたいですよ。まあそれこそ、大往生だいおうじょうであれば、「もう後々の者あひあとに任せてやれ

るわ「へらいに思えるかもしれない。そしたらもう、悲しいというよりも、「ああよかったねえ、ご苦労さんやったねえ」って言うて、そら子や孫たちも含めて、受け入れることができると言いますかね、心の準備もできてたでしょうから。

でも、そうでなかったりしたら、亡くなった方も先行きの不安がある。そんな中に、一緒になってね、「これからどうするんよ」とか、「大変やんか」とか、「もうー…」とか言うたら、もう、傷口に塩を塗り込むような感じになりますもんね。まあ、そういうことをせんようにっていうことなんでしょね。

「ほめてやれば御霊が浮かぶ」、「褒めてやるって、何褒めてあげたらえ

えですか？

そやねえ、「よう頑張がんばって来たねえ」いうことなんでしょう。「ま、色々あったけど、よくここまで頑張がんばって来て、過こして来たねえ。お疲れ様、ありがとう」言うて。「ようやってくれたねえ」言うて。「あんた偉えいかったねえ」って。長い患わづいいもあった方かたであれば、「長い間しんどかったやろうけど、よう頑張がんばったねえ」言うて。「そんな時でも、周りの人に心を配あはって、感謝してやってて、偉えいかったわあ」言うて。「ようやったねえ」言うてね。これ、褒ほめてあげますよね。

でも、御霊ごたま様が不安になるようなこと言うたら、「あの時こうしてたら、あんたよかったのに。アホやなあ…」、「もう、あんたはこんな、あん時は

こんなことしたからこないなったんやあ」とか。まあ、実際にそんなところもあるんかもしれませんですけど。「この先残された、もう、周りの人たちはどないなるんよお、もう」って言うて。まあ、御霊様が不安になるようなね、後悔するようなことを、まあわざわざ枕元まくらもとで言わんでもええですわねえ。安心させてあげる。「お疲れ様でした」言うて、労あつを労あつってあげて。

で、「神様には、あなたのことはもちろんやけれど、残された家族のこと、仕事のこと、家のこと、気になるかもしれへんけど、私ら残されたものでしっかり神様をお願いさしてもらおうし、私たちにできることは精一杯さしてもらおうから、まああどつか安心してね」言うて。いろいろうにして、

できるだけ安心さしてあげると、そしたら御霊様も安心されるでしょうね。これが大事なんですネ。

大事なことは結局、自分中心で物事を考えとるんか。相手のことをこ
ういう時にでも心を配って、そして、その死に立ち会ってるのんか。ま
あここのんでしようねえ。神心を、その場でもう発動できてるんでしよ
うかね。これが一番肝心かんじんでしょう。

「ほめてやれば御霊みたまが浮かぶう」っていうの、これね、私、このみ教えを
頂く前から、実は神様によく言われてましてね。「褒めてほやれ、褒めてや
れ」って。でも、私言われてたのはね、生きてる人に対してよく言われて

ましたね。今でもまあ言われますけど。「褒めてやね、褒めてやね」って、
「褒めてやれば御霊が浮かぶから」って。これ、生きてる方のみ教えや
と思っただんです。でも、このご理解にその後に出会わせて頂いたら、
亡くなった御霊様にも、仰っておられる。これまあ、もちろん理解でき
ます。

まあ考えたら、生きてても死んでもそんな、肉体という服脱ぐだけ
で、御霊は生きてますから、ずっとね。変わらないのですよね。だからま
あ、お国替えさして頂きたいという時に褒めてやれば、そら御霊様として、
「ああ、よかったわあ」と思って、安心されるよねえ。亡くなった時だけ
やない。何年経っても、何十年経っても、五十年経っても、「あなた様の

おかげで「って言うって、大事にね、感謝して言わしてもらったら、喜ばれるもんね。

御霊様に対して、安心してもらえるようにね。元気でいるようにしてあげんとあきませんよね。そのためには、皆頑張がんばって生きてるんですから、まあ足りんといろはあるにしても、まあ道から逸それることがないとは言えんけど。でも責めるのは簡単なといろがあって、皆、めへりというものもあり、難儀なんぎなこともあり、そんな中なかにでも、今いまで生きる精一杯せいいつぱいで、生きながらにこまで来こさせてもらっている。今いま口くちを生きいきてるわけですから。この世で生きてる限りは、いろんな決まり事やらルールやら、人としての生きる道みちっていうものは当然ありますから。それをまあ、道みちに、道理どうり

に触れるようなことがあったら、お咎め受けたりすることありますわね。
警察に突き出されるなり、逮捕たいほされて、また刑務所入るなりってこと、
もちろんあるわけです。

だから、人としての行いにおいては、いいやら悪いやらもあるし、時
と場合によって裁かれるひかこともあるんですけれども、それはそうとしな
がらね、道から逸れるようなことがあった人であったとしても、それで
も、いろんなものをこう抱えながら生きていく中で、そう生きざるを得
なかった、その人の悲しさと言いますかねえ。それを思うと、ま、いよい
よのいよいよは、罪を憎んで人を憎まずと言いますか、したことについ
てはもう、いかんことであつたとしても、でもその人自身もそうならざる

るを得ない、悲しさというものがあつたんやろうと思うと、いよいよのところは、まあ神心がこちらも出てくるっていうところありますね。

ま、人間は、一生懸命生きてても、おぢや過ちが多々ある存在ですから。知ってのご無礼、知らずのご無礼、あるいはご無礼っていうわけじゃなくても、行き届いてないから、不行き届きっていうこともある。これも、人間としては本当によくあることで、ご無礼、お粗末、不行き届き、ごういたことあるお互いですから。生きてる間にした、そういったご無礼、お粗末、不行き届きが、自分が亡くなる時にもかかって来て、「ああ、この先どうなるんやなあ」とか、心配になることもあるかもしれませんし、「あん時こうしてたら」と思って、お国替えることもあるかもしれん

し。まあ、いろんなお国替えの仕方があるでしょう。

でもどっちにしても、残されるものとして、一人の人間に対する接し方としてやっぱり、神心で接していくということは大事なあとだと思いますね。信心頂いてるものとしたら、その神様の心で、接していく。それが、悪いことを言つて、枕元でね、亡くなった人の前で、悲しんだり叫んだり、まあそういうふうにして、御霊様が不安になるようなことを言うことはなるだけやめて、御霊様のことを一番に思って、この御霊様が安心してお国替えできるように、あの世に行かして頂くように、そのことを思って、褒めてあげて、で、「先のことは心配するな」と言つて、「ちゃんと神様に道をつけて頂けるように、こちらに残されたものとして信心

さしてもらおうから、あなたはもう信心できんやけど、こちらでできる限りの信心もさしてもらおうし、こんごうだうじん金光大神様にお届けして、また道をつけて頂けるようにご祈念もさしてもらおうし、あの世に行ってもかまた和太先生（尼崎教会初代）や歴代の御霊神様に、みたまのかみお力添え頂いて、お働き頂くし。だからもう、そんな心配せんではないから「言つて。「私たちにできることは精一杯さしてもらおうからね」「お疲れさん。ようこここまで頑張つて来たね。ありがとう」「言つて。言つたら、浮かばれるでしょうねえ。そんなふうにして見送ってもらえたら、うれ嬉しいでしょうね。

そういうふうにして、信心頂いてる者は、死を迎える、迎えたその方々に対する接し方として、やっぱり神心を大事にして接していくということ

と。これを心にかけておいたらいいと思います。まあ、今、今日とかいうわけじゃないかもしれませんが、ああなるほど、そういうご理解があるんやなということ、心にかけて頂けたらと思います。

今日も一日、神様からおかげを頂いて、新しい命を頂いて、新しい日を頂いて、神様と一緒に、こんこうだいじん金光大神様と一緒に、わが身わが一家を練習帳にして、今、自分が大事にさして頂いているお稽古けいこを、今日一日も続けて頂いて、神様のおかげを身一杯受けるように、器作りはげに励まして頂きたいと思います。

信心は、したらただけおかげになるんですからね。せんのは勿体もったいな

らでございます。今日も一日、信心のお稽古をなせて頂きまして。
よへお参りでした。

(了)



津田昇平教話 第八十話

令和三年三月二一日 朝の教話

令和四年六月二一日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三一七―五
